

村のあだ名

— エチオピア南部コンソ社会の命名と分類 —

篠原 徹

エチオピアの首都アディス・アベバから南に600km行くと小山塊があり、この山の頂上に密集した集落を作るコンソという特異な有畜農耕民がいる。1993年4月から6月にかけて、この社会の2度目の調査をおこなった。住み込んだ村に僕の2人の息子と年齢が同じで性格もひとりがセッカチ、他のひとりがオットリと、これまた息子と同じで、そして仲のよい2人の少年がいた。この2人を前回の調査のときから特にかわいがっていたが、今回もこの2人とよくつきあうことになった。

僕の住んだ村は標高1880mにあり、それは本当に山のピークにある。そして山の上の円形の高い石垣で囲まれた城塞のような村の外は、みわたすかぎり石のテラスでできた段々畑である。村から下に降りるとそこにはサガン川が流れていて、マラリアも猛威をふるう標高900mの低地である。そこに行くには石ころだらけの山道を降りていかなければならない。コンソの人々は一日で出作り小屋のある川岸まで平気で往復するけれども、僕にはかなりきついことである。だからいつもこの2人の少年オルカイドーとバシュラをつれて、ノンビリと数日かけてのんきに旅をすることにしていた。尾根道からやがて谷筋に山道は下っていくが、道に沿って山の上の密集した本村の各家の出作り小屋が右に左に出てくる。少年の知り合いか親戚の出作り小屋に泊まればいいからこの旅は楽なものだし、時には思わぬご馳走にでくわすこともある。夜は満天の星を眺めながら石でできたヤギ小屋の上で3人とも並んで寝る。ヤギを屠って腹一杯の晩などは少年たちは夜遅くまで、といっても10時を過ぎることはないが、僕の隣で笑いふ

ざけあっている。そんなとき会話が一瞬途切れ絶妙なタイミングでアルマラ・マチャゲの歌を2人で一緒に歌いだすのだ。

オイエエ、オイエエ

アルマラ マチャゲ

チャガ スウ マラッカ

ダンダイ スウ マサルタ

ときどきクスクス笑いながら僕のほうをみて「トール、リケイダ？（わかるか）」と合図を送ってくる。蒼穹にシルエットをつくる巨岩の風景が人を哲学的瞑想に誘うが、歌は逆に限りなく長屋の噂話に近く、僕をコンソの世間へ引き戻す。オイエエはかけ声である。次のマチャゲという村はアルマラつまり怠け者の村だということである。その後にてでくるチャガはコンソの主食である一種のビールであり、マラッカはそれをさらに蒸留して作った強い酒である。マサルタというのは雄のヒツジをわざと運動不足にさせ異様に太らせ、その中で彼らが最もうまいという尻の肉のことである。だからこの歌はマチャゲの村の奴はみんな怠けものでビールや酒ばかり飲み、上等のヒツジの尻の肉ばかり食っているわけで、他の村をけなす、あるいは悪口を主題にしたものである。

コンソは34の村に分かれている。マチャゲが怠け者なら僕の住んだ村にもあだ名がついているかも知れない。人やものを分類し命名することは文化によって異なる。同じものが異なる分類基準でいくつかの名称をもっていたり、他の文化に属するものにとっては予想外のものが名称をもっていたりすることもしばしばある。2度目のコンソの調査は国際協力事業団の民族植物学の専門家とし

て派遣された。主たる仕事はコンソという優秀な有畜農耕民がどのような栽培植物を保有していて、それをどのように管理しているかをまず調べることであった。コンソは多数の栽培植物を保有しているが、とりわけソルガムは多数の品種をもっていて、それぞれの品種の特徴を明確に認識している。20種類以上あると思われるが、聞いていくとこれは酒を作るのにいいとか、鳥の害にあわないとか弁別している理由がそれぞれある。僕が村のあだ名や人のあだ名あるいは愛称、悪口など、とにかく分類して命名することに特別興味をもったのは、栽培植物・野生植物の民俗分類への関心の延長線上にそれらがあるからだ。

オルカイドーとバシユラは出作り小屋にくると急にいきいきとしだす。それは大人や親の束縛から解放されるからであろう。あまり村の中では聞けないことを教えてくれる。僕はコンソと敵対する遊牧民ボラーナをコンソの人々はケルゲイダといっているのを知っていたが、他にもあるにちがいないと思っていた。特に悪口に近いものが。そしてボラーナ側も、コンソの悪口をきっともっているに違いない。まずボラーナの悪口から聞いてみた。一番初めに少年たちの口からでた悪口はサゴダという言葉であった。これは「怖い」という意味である。そしてつぎつぎでできた。バクティ、これは「なさけないやつ、弱虫」という感じであり、親がよく子供の失敗に対し叱責するとき使う言葉である。ハーレーニャト、だんだん内容が激しくなり、これは「女を食べる」ということだそう。もう一つ「トユルイ」というのがあり、これは「お金のない、何も無い乞食」くらいの意味である。総じて僕の印象では、コンソはボラーナをたいへん恐れている。同時に遊牧という生活様式をかなり軽蔑している。

1991年に僕はやはり同じコンソの村に4カ月住んでいた。この時点ではコンソとボラーナの民族間紛争は悪化していて、双方の襲撃により死者もでていた。どちらかといえば、コンソのほうが分が悪く、実際襲撃による死者の数もコンソの方が多かった。衝突は出作り小屋の最前線サガン川周

辺でおこった。ボラーナの領域にコンソがどんどん畑を作っていくことに対して、ときどき遊牧で回ってくるボラーナが怒り、ソ連製の銃カラシニコフでコンソを襲い、ウシを略奪していくというパターンである。僕は一度コンソの男をボラーナの町に車で連れていったことがあるが、コンソの村の中では喧嘩ばかりで腕自慢の男も、ボラーナの町ではかりてきた猫のようにおとなしく、その変わり身の早さに唖然としたことがある。コンソにとってボラーナのイメージは、これらの悪口がよく表現していると思う。当然この逆があるはずである。嫌がるオルカイドーに、おまえたちはボラーナからなんといわれているのか知っているのだから教えろとしつこく聞く。やっと返ってきた答えはアジョフタという言葉である。どういう意味だと聞いてもなかなか答えなかったが、ついにそれは「毎日女と寝る奴」というたいへん光栄な悪口であることがわかった。まだあるだろうと、オルカイドーを責めて聞きだしたのは、オフアットという言葉で、これは「物乞いする」ということだから、ボラーナにも同じようなものがあり、お互いさまである。おもしろいのは、ハッレという悪口である。「ロバの妻」ということだから、もっと奥深い内容を暗示しているのだろうが、オルカイドーはそれ以上言及しなかった。イジョツレというのもあったが、これは日本語で言えば「餓鬼」という言葉がぴったりである。ボラーナらしい悪口である僕は思う。

かくのごとく悪口や愛称には言うものと言われるものの、社会関係が表現されている。コンソを取り囲んでいるのはボラーナだけではない。エチオピア西南部のように多数のエスニック・グループが割拠するところでは、自己を中心にその周りのエスニック・グループは敵対・友好・中立・差別のいずれかに分類され、多くは普通の言い方以外に別称をもっている。ボラーナやコンソという言い方がいかにも政治的にも社会的にも中立的表現であるのに、別称は言外に敵対・友好を含意しており、ときには悪意の表現として使われる。

コンソと敵対するグループはボラーナとグジで

あり、共に遊牧民である。グジはジャムジャーマという別称をもっている。別称に敵対しているという意識が含まれているかは、この言葉が発せられる状況やその時の人の表情から推察できる。これに対して同じ遊牧民でも、コンソの東北部に住むハマールに対してはアウェーダという別称をもっているが、それには友好という意味が付与されているように思う。その近くに住む農牧民ツァマイもクイレダという別称をもち、コンソは彼らと友好関係を保っている。事実ツァマイやハマールが牛を放牧させながら、コンソ・ランドを通過してアルバミンチという町までたどりつくことはしばしば見かける光景であり、これに対してコンソはなんの不快感も示さない。

コンソの北側に住む生活様式もほぼ同じ農耕民ギドレ・グマイデ・クスメ・バアイテは、それぞれギラーダ・アイロツテダ・クスマ・バアイタというむしろ愛称をもつがこれらは中立的な関係を合意している。じつはコンソというエスニック・グループは純粋に単一な民族からなっているのではなく、こうした周辺の民族との若干の婚姻関係やコンソ以外の民族から出自した伝承をもつコンソ内の階層が存在する。ブルジはコエラという別称をもつが、これはコンソ内の土器作り・鍛冶屋・商人の蔑称でもある。本当にブルジ出自なのかどうかはまだ僕の調査ではわからない。コンソはよく酒を飲むけれども、そんなとき喧嘩がおきてやれあいつはコエラだ、あいつの女房はゲルゲイダ（ボラーナ）だと非難することがあり、この2つの呼び方には差別が含まれていることは明らかである。

こんなふうに他者を分類して命名することに多重の意味が付与されているらしいとすれば、最初に挙げたコンソ内の村マチャゲは、歌に歌われるまでもなくそこにはアルマラつまり怠け者の意味が含まれているにちがいない。コンソには34の村がある。そして村には名前がある。また、そこに住む村人を指す言葉もある。これには、村の名から転化した場合とそうでない場合がある。そして、村人を指すばあいは、通常村の名に接尾辞を

つける。

表で示したのはコンソの34の村の名前と村人の総称である。おそらくこの総称も周辺のエスニック・グループと同じように敵対・友好・中立・差別を含意しているにちがいない。僕の住み込んだサウガメの隣村はゲラというが、そこは鍛冶屋がたいへん多い村である。サウガメは土器作りの人が多い。こうした技能集団の特徴を知るため当初今度はゲラに住み込んでみようと思ひ、それをサウガメの友人たちにいって言下に否定された。あそこは辞めろ、おまえの持ち物はみんななくなってしまうぞと脅かされた。つまりゲラは泥棒が多いというのだ。次に調査するチャンスがあれば、サウガメの村人をゲラの人がなんとっているのか知りたい。きっと34の村では相互にいろんな評価をして適切なあだ名をつけているのだろう。

表 コンソ34の村の名称と村人の呼び方

	name of village	villagers	region
1	qārāte	--	gawwada
2	madāriyanna gōzāba	--	qolme
3	gālgālanna qolmale	qolmale	qolme
4	t'ābālanna quch'āla	quch'āllēda	qolme
5	doha	dohaata	faasha
6	gāsārgiyo	gāsārgiyooda	faasha
7	kashale	kashala	faasha
8	sāwgame	sāwgameada	faasha
9	geera	geraada	faasha
10	abbaroba	abbarobaada	galatte
11	nalaya sagan	kandimaata	galatte
12	jarso	idiluga	galatte
13	dāra	--	galatte
14	durayte	durayta	galatte
15	dokotu	dokotooda	galatte
16	sorobo	nagulda	galatte
17	tōshmāle	--	dulo
18	lāhayte	--	dulo
19	galabo	galabooda	dulo
20	arfayde	arfayda	dulo
21	gawwada	gawwada	gawwada
22	turuba	--	gawwada
23	ōyāna	--	gawwada
24	borqara	--	qolme
25	gunyāra	gunyāraata	qolme
26	kāmāle	kāmāla	qolme
27	faasha	faasha	faasha
28	dābāna	tābāna	faasha
29	goch'a	goch'ada	galatte
30	gamole	gamoleeda	galatte
31	māch'alu	māch'alaida	galatte
32	gaho	gahooda	faasha
33	māch'āqe	māch'āqa	faasha
34	buso	busoda	galatte

この表の村の名はコンソのMinistry of culture and sportsに布にかかれた地図があり、それにアムハラ語表記で村の名がかかれていたものを使っている。アムハラ語表記からの音韻表記は金沢大学の柘植洋一氏にしていた。アムハラ語表記では子音の重複、母音の長短が区別できないのでそれは筆者の判断によっている。

コトやモノを分類し命名する行為は、その文化が何に重き価値を置くかを教えてくれる。こうしたことに着目していると意外なことがわかる場合がある。サウガメの人は一般的に3つの名前を持つ。まず学校で通用する名前はエチオピアの支配民族アムハラ流のもの。そして村の中で通用するのはコンソ流の名前とあだ名である。例えば少年オルカイドーはアムハラ流の名前であり、コンソ流の名はケラというし、痩せた男というあだ名も別にある。オルカイドーの友達とときどき僕のところにも現われるウルボという少年がいた。僕はてっきりそれが彼のコンソ流の名前だと思っていた。ある日、鳥の名前を聞いていてウルバイダというソルガムの黒い害鳥を知った。オルカイドーは、笑いながらウルボはウルバイダのことだと教えてくれる。つまりウルボの正式な名前はガニューウローで、彼の皮膚の色が黒いためこのあだ名がついたということだ。しかもこれには多少の蔑視があって、サウガメでは人間を「赤い人」

「赤でも黒でもない中間の色の人」「黒い人」と分類し、この順位に好まれることが後でわかった。

あだ名に注意していると、彼らが飼うウシ・ヒツジ・ヤギが名前をもっていることもわかってきた。それは日本人がちょうど飼う犬に名前をつけるような付け方ようだ。しかし、普通の家族でウシ・ヒツジ・ヤギあわせて50頭近くいるのがすべて名前をもつのも我々にしてみれば不思議が気がする。これについても村の名前と同様どんなシステムになのか知ってみたい。将来の課題である。ちなみにサウガメの僕のあだ名は、アルマリッタつまり怠け者に落ち着きそうだ。

最後になりましたが、村の名前の音声表記については金沢大学の柘植洋一さんにたいへんお世話になりました。御礼申し上げます。今回の調査はジンカに向かう柘植さんと同行したが、車のトラブルが頻発し困難な旅であったことを申し添えておきます。

(しのはら とおる 国立歴史民俗博物館)

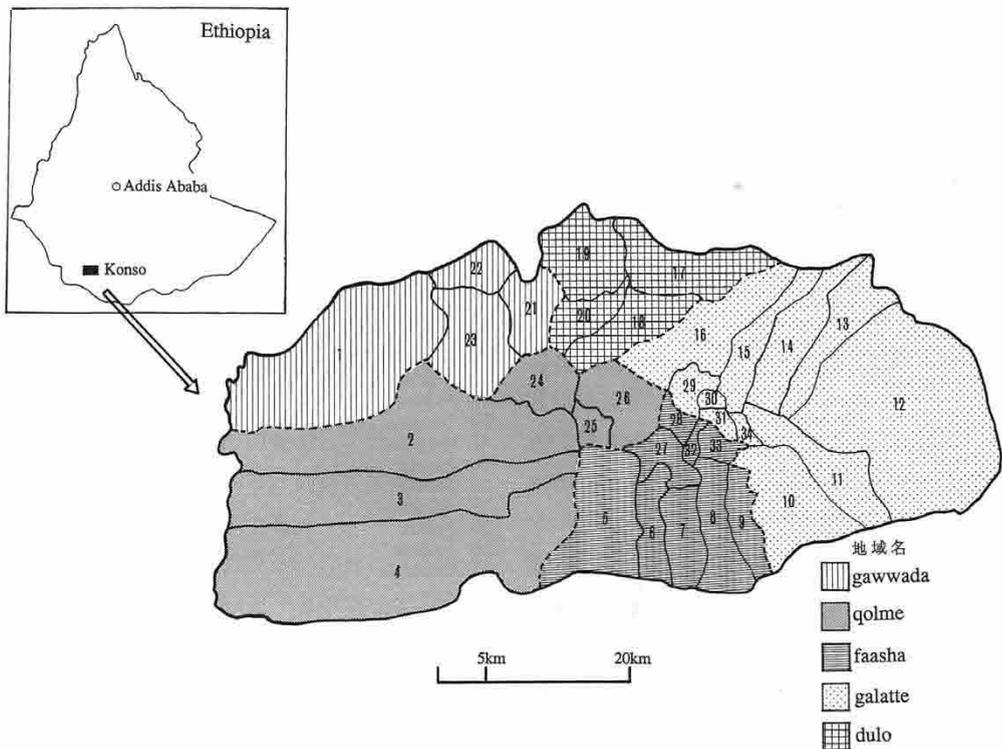


図 村の領域と地域名(数字は表の村の数字と対応する)